

故平川 彰会員追悼の辞

会 員 原 實

日本学士院会員平川 彰先生は平成一四年三月三十一日老衰のため八七歳を一期として千葉の御自宅に於いて逝去されました。越えて四月四日午前一時より東京駒込の真浄寺において葬儀が行われ、本院より久保第一部部長、築島会員を初め学界、仏教界より多数御会葬賜りました。

私は先生の高校、大学の後輩として久しく学恩を受けましたが、その学問を正しく理解する能力のない事をここに恥じ入りながら、以下に先生の御経歴と御業績の一端を御紹介申し、その御遺徳を偲ぶよすがとさせて頂きたいと存じます。

先生は大正四年一月二一日愛知県豊橋市に御誕生になり、第八高等学校文科乙類を経て昭和一四年四月東京帝国大学文学部印度哲学梵文学科に入学、大学院特別研究生、研究室助手を経て昭和二五年二月北海道大学法文学部助教教授を拝命されました。四年後の二九年四月生涯の師と仰がれた宮本正尊博士の定年御退官の後を承けて東京大学文学部助教教授に配置転換され、三七年教授昇進、五〇年定年退官、名誉教授の称号を受けられました。御退官後は一〇年間引き続き早稲田大学第一第二文学部において教鞭を取られ、更に平成八年四月以降御逝去の日まで学校法人国際仏教学院理事長、国際仏教学大学院大学教授の任に在られました。この間一貫して教育と研究の任に当たられました。この他日本印度学仏教学会理事長を初め日本宗教学会、日本仏教学会等の理事評議員

を勤められ本邦學術の發展に貢献されました。更に昭和五〇年紫綬褒章、五五年日本学士院賞等数々の榮譽を受けられ、平成五年二月一三日本院会員に選定されました。

以上先生の御経歴の概要であります、次に先生の御業績の一端を御紹介申し上げます。

先生の御専門は広くインド、中国、日本の三国にわたる仏教史で、それは昨年完結を見ました『平川 彰著作集』全一七巻に纏められておりますが、ここで先づご研究の「対象」となりました仏教典籍の概要と、仏教研究の「方法」を簡単に御説明申し上げます。

古来、仏教の典籍は総括して三蔵と称せられ、経律論の三つに分類されます。その中経蔵は釈迦の直説とみなされるもの、律蔵は出家修行者と在家信者の生活規範、並びに教団の運営規則、論蔵は後に釈迦の教えや教理上の諸問題を分析、研究したものであります。この三つの蔵、即ち仏教の全典籍をマスターした人を古来三蔵法師と呼んでおります。

従来、多くの研究者はこの三蔵の中で、仏の直説の経蔵と仏教哲学を盛る論蔵を扱ってりましたが、先生はお若い頃からそれまで顧みられる事なかった律蔵を専攻され、三国仏教史を教理や哲学の立場よりも、戒律の実態、教団史の發展の側面から綿密に辿られました。それは学位論文『律蔵の研究』（一九五九年）に結晶しております。

しかし教団史は教理史と不可分であります。キリスト教の宗教改革に見られます様に教団の対立抗争分裂の歴史は、教理に対する見解解釈の相違に由来しますので、各教団の律蔵の詳細な研究は当然の事ながら先生を仏教教理の分化發展の研究に導きました。原始仏教から部派仏教（小乗仏教）、更に大乘仏教に到る教理、教義の發展、就中小乗仏教と大乘仏教の対立抗争は教理と教団の両者に如実に反映しております。先生は阿毘達磨と称する小乗仏教の哲学体系、並びに中観唯識という難解な大乘仏教の学説にも傾倒され、久しく東大においてもそれ

らを御講義になりましたが、更に大乘仏教の成立に関して独自の仮説を立てられました。

この様にして先生はインド、中国、日本にわたる仏教教団史、仏教思想史を究められましたが、次に昭和五五年度、日本学士院賞の対象となりました『俱舎論索引』三巻について御説明申し上げます。ここに俱舎論とは五世紀の学僧世親の著作で、大小乗にわたる仏教の基本的な哲学的語彙を網羅し解説したものであります。本書の重要性はその梵文原典に多数の注釈が書かれた事によっても知られますが、それは夙にチベット語、中国語に翻訳されそれぞれに更に多数の注釈研究が施されました。先生は梵文原典をそのチベット語訳、中国語訳と対照させながら、有機的に一字一字の索引を纏められ、本書の出版は内外の研究者に多大の学問的便宜恩恵を与えました。先生の超人的記憶力は就中漢訳仏典に反映し、漢語による仏教研究では文字通り『生き字引』の令名をほしのままにされ、外国人研究者の多くもその学識を高く評価しておりました。この日本古来の漢文仏典による伝統的仏教学の徹底的訓練を受けた学僧は今や数少なく、先生は最後の学者であったと思われ、先生の御逝去はその意味で一時代の終わりを告げるものであります。

ここに言及致しました日本古来の伝統的仏教研究に関連して簡単に本邦仏教学の研究史に言及させて頂きます。我が国の仏教学は六世紀の仏教渡来以来各宗派の高僧知識の究める所となり、その伝統は奈良、平安、鎌倉、江戸時代を通じて今日に到るまで連続として続いております。一方西洋に在りましては一五世紀の終わりに近く Vasco da Gama がインド航路を発見して以来漸次学者の研究対象となりましたが、一九世紀のインド古典学の飛躍の発達に伴い、仏教もその一環として、パーリ語、サンスクリット語の原典に基づいた厳密な文献学者の究める所となりました。この洋の東西にそれぞれ独自に発達して来た仏教学はしかし明治開国を機に接触する事となり、以前本院会員であられました南条文雄、高楠順次郎、辻直四郎博士はつとに欧州に学んで彼地の方法を本邦に導入されました。

幼くして和漢の仏教書に親しんで伝統的教学を身につけ、長じて西洋の批判的方法論を体得された平川先生はまさしくこれら東西二つの伝統を一身に体現した存在として独自の境地を開拓され、内外の研究者の尊崇を受けておられました。その中でも私共後学の者が特に感銘を受けますものは、先生の問題の所在を的確に捉える視点の鋭さであります。広い視野の下、内外の研究史を踏まえて今何が最も重要な問題であり且つ我々日本の研究者が最も貢献し得る課題は何かを適確に見据えておられました。先生の手になる『律蔵の研究』『初期大乘仏教の研究』『俱舍論索引』等はこの間の事情を如実に物語っておりますが、多くの子弟も先生の御指示に従って安んじて夫々の研究を進め、学の王道を歩む事が出来ました。研究者として、又教育者として果たされました御貢献は誠に量り知れぬものがあつたと申せましょう。御逝去に当たりそれを悼む者は独り本邦に限りませず、葬儀に当って海外からも多数の学者が弔電弔辞を寄せました。

私も今回この稿を草するに当り先生の御業績に今一度接する機会を持ちましたが、御生前に何故にもっと習っておかなかつたかと、自らの怠惰を悔やむ事しきりでございます。

ここに在りし日の先生を偲びその御学徳を顕彰し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(編集付記)『日本学士院紀要』第五十七卷第二号(平成十四年)に掲載された追悼文より註を割愛し、転載させていただいた。